



# 彩の国経済の動き

## - 埼玉県経済動向調査 -

< 平成 30 年 5 月～6 月の指標を中心に >

埼玉県 企画財政部 計画調整課

平成 30 年 7 月 31 日

本経済動向調査は、埼玉県内における生産、雇用、物価、消費、企業動向など、経済関連の各種統計指標を時系列で見ることにより、その動向を把握・分析したものです。また、統計指標の収集・分析に加え、他の調査機関の経済関係報告の概要を取りまとめ、県経済の動向を総合的に把握できるものとしています。

1	本県の経済概況 < 県内経済の基調判断 > .....	2
2	県内経済指標の動向 .....	3
	(1) 鉱工業指数 < 生産・出荷・在庫 > .....	3
	(2) 雇用 .....	5
	(3) 消費者物価 .....	6
	(4) 消費 .....	7
	ア 家計消費 .....	7
	イ 百貨店・スーパー販売額 .....	7
	ウ 新車登録・届出台数 .....	8
	(5) 住宅投資 .....	8
	(6) 企業動向 .....	9
	ア 倒産 .....	9
	イ 景況感 .....	10
	ウ 設備投資 .....	12
4	経済情報 .....	14
	(1) 各種経済報告等 .....	14
	ア 内閣府「月例経済報告（7月）」 .....	14
	イ 経済産業省関東経済産業局「管内の経済動向（5月のデータを中心として）」 ...	15
	ウ 財務省関東財務局「埼玉県の経済情勢報告（4月判断）」 .....	17
	エ 財務省関東財務局「管内経済情勢報告（4月判断）」 .....	18
	(2) 今月のキーワード「アントレプレナーシップ」 .....	19
	(3) 今月のトピック「平成30年上半期 埼玉県内企業倒産状況」 .....	20

# 1 本県の経済概況 < 県内経済の基調判断 >

## 総合判断

### 県経済は緩やかに回復している

前月からの判断推移

足下では住宅が弱含み、生産も一進一退の動きとなっているものの、雇用情勢は改善しています。個人消費も持ち直し、消費者物価は上昇に転じつつあります。企業活動関連では倒産は低水準ですが、景況判断や設備投資に足踏みがみられます。「県経済は緩やかに回復している」とし、前月からの総合判断を据え置いています。

## < 個別判断 >

### 生産 一進一退の動きとなっている

前月からの判断推移

5月の鉱工業生産指数(季節調整済、平成22年=100)は95.4(前月比+2.6%、前年同月比+2.2%)。同出荷指数は97.5(前月比+2.2%、前年同月比+3.5%)。同在庫指数は116.6(前月比1.4%、前年同月比0.7%)。県内の生産活動は一進一退の動きとなっている。

### 雇用 改善している

前月からの判断推移

5月の有効求人倍率(季節調整済、新規卒者除きパートタイム労働者含む)は1.31倍(前月比+0.02ポイント、前年同月比+0.11ポイント)となった。なお、就業地ベースの有効求人倍率は1.49倍。完全失業率(南関東)は2.5%(前月比0.3ポイント、前年同月比1.0ポイント)。県内の雇用情勢は改善している。

### 消費者物価 上昇に転じつつある

前月からの判断推移

5月の消費者物価指数(さいたま市、平成27年=100)は、総合で100.5(前月比0.2%、前年同月比+0.3%)、生鮮食品及びエネルギーを除く総合指数は100.8(前月比0.2%、前年同月比+0.2%)。消費者物価は上昇に転じつつある。

### 消費 持ち直している

前月からの判断推移

5月の家計消費支出(関東地方、2人以上世帯)は298千円(前年同月比+0.8%)となり、2か月ぶりに前年同月実績を上回った。5月の県内百貨店・スーパー販売額(全店)は822億円(前年同月比1.6%)となり、2か月連続で前年同月実績を下回った。6月の新車登録・届出台数は19.2千台(前年同月比5.7%)となり、3か月ぶりに前年同月実績を下回った。個人消費は全体的に持ち直している。

### 住宅投資 弱含んでいる

前月からの判断推移

5月の新設住宅着工戸数は4,789戸(前年同月比2.3%)となり、2か月ぶりに前年同月実績を下回った。住宅着工動向は弱含んでいる。

### 企業倒産 低水準で推移している

前月からの判断推移

6月の倒産件数は24件(前年同月比8件)と3か月連続で前年同月実績を下回った。負債総額は28.15億円(前年同月比20.94円)となっている。企業倒産動向は件数・金額ともに低水準で推移している。

### 景況判断 回復に足踏みがみられる

前月からの判断推移

埼玉県産業労働部 四半期経営動向調査によると、30年4-6月の「経営者の景況感」は2期連続で悪化した。財務省関東財務局 法人企業景気予測調査によると、30年4-6月の「貴社の景況判断BSI」は、全規模・全産業ベースで「下降」超幅が縮小している。

### 設備投資 増加に足踏みがみられる

前月からの判断推移

埼玉県産業労働部 四半期経営動向調査によると、30年4-6月に設備投資を実施した企業数は前期から横ばいとなっている。財務省関東財務局 法人企業景気予測調査によると、30年度上期の設備投資額は全規模・全産業ベースで前年同期比15.8%の増加見込み。30年度通期は、全規模・全産業ベースで同1.9%の減少見通しとなっている。

### 景気指数 下げ止まりを示している

前月からの判断推移

5月の景気動向指数(CI一致指数)は127.6(前月比0.4ポイント)となり、2か月ぶりの下降となった。また、先行指数は99.6(前月比+2.6ポイント)となり、2か月連続の上昇となった。(埼玉県統計課「埼玉県景気動向指数」平成30年5月分概要)

## 2 県内経済指標の動向

経済指標のうち、「前月比(季節調整値)」は経済活動の上向き、下向きの傾向を示し、「前年同月比(原指数)」は量的水準の変動を示します。

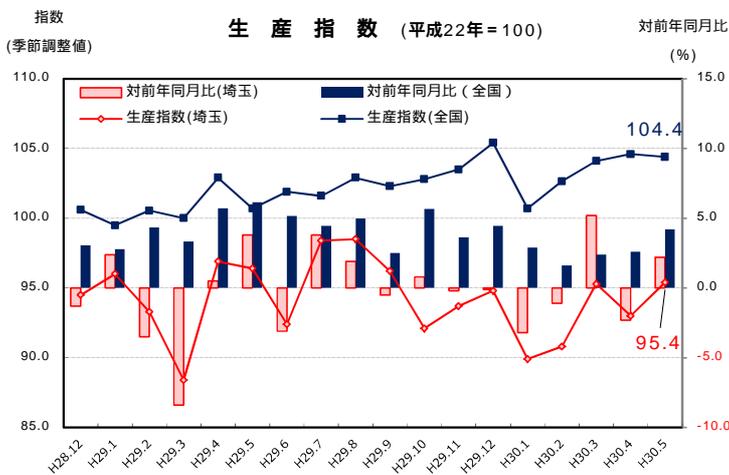
### (1) 鉱工業指数 < 生産・出荷・在庫 >

< 個別判断 > 一進一退の動きとなっている (前月からの判断推移)

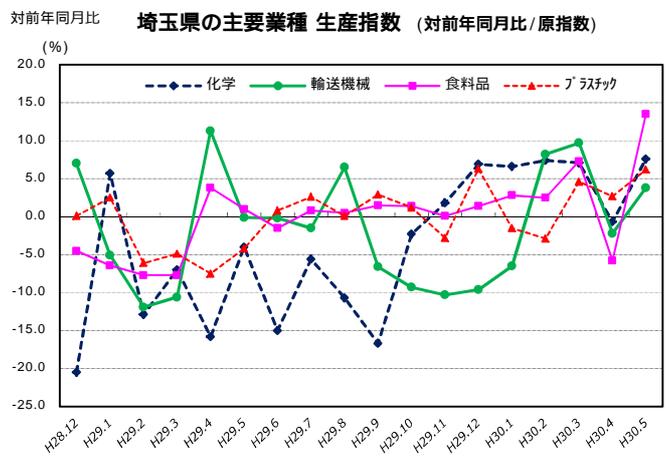
#### < 生産指数 >

5月の鉱工業生産指数(季節調整済値)は95.4(前月比+2.6%)となり、2か月ぶりの上昇となった。前年同月比では+2.2%となり、2か月ぶりに前年同月水準を上回った。

業種別でみると、食料品工業、化学工業、業務用機械工業など23業種中9業種が上昇し、生産用機械工業、輸送機械工業、窯業・土石製品工業など14業種が低下した。



出所：経済産業省・県「鉱工業指数」



出所：経済産業省・県「鉱工業指数」

#### < 参考 > 業種別生産ウエイト

県の指数は製造工業(22)と鉱業(1)の23業種に分類されています。

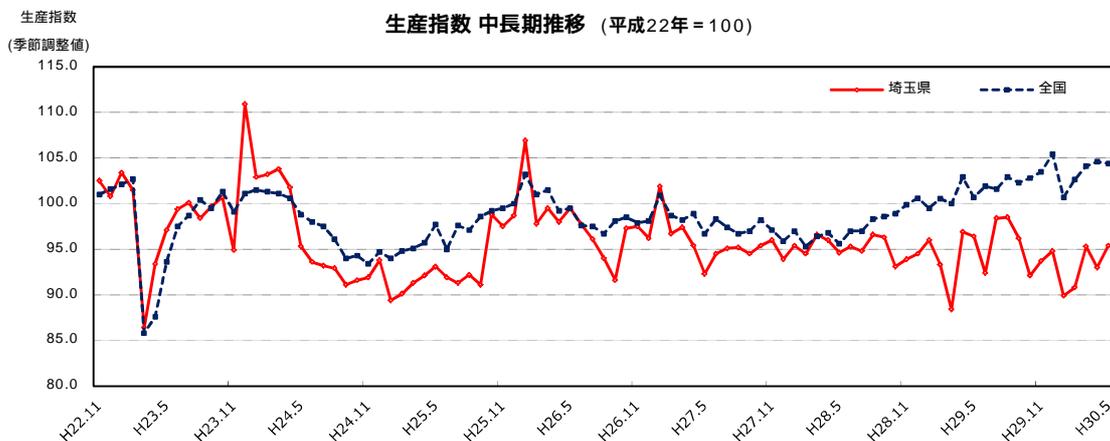
埼玉県の鉱工業全体に占める業種別の生産ウエイトは以下の通り。

化学工業 18.1% 輸送機械 12.5% 食料品 10.3% プラスチック 7.3% 印刷業 6.2%

業務用機械 5.5% 生産用機械 5.1% その他 35.0%

【出所】県「鉱工業指数」基準時=平成22年

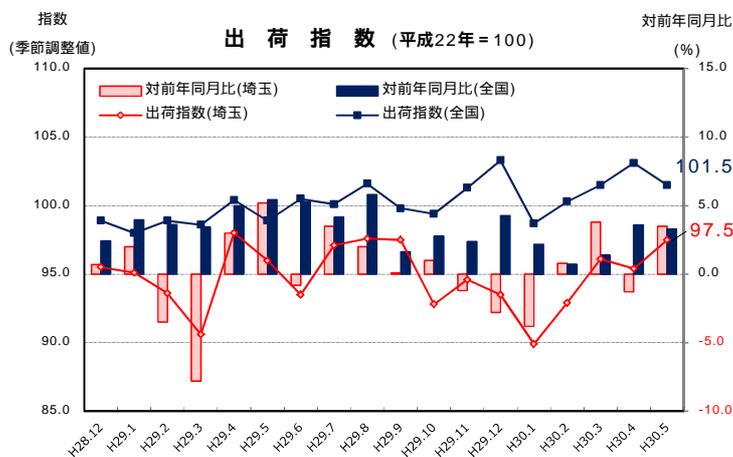
#### < 参考 > 生産指数の中長期推移



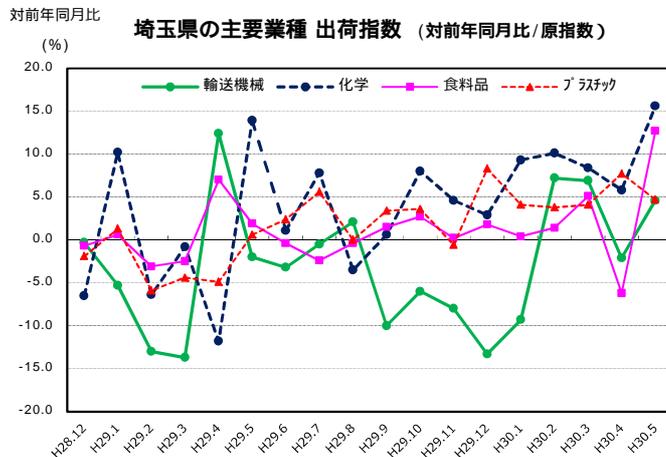
出所：経済産業省・県「鉱工業指数」

## < 出荷指数 >

5月の鉱工業出荷指数(季節調整済値)は97.5(前月比+2.2%)となり、2か月ぶりの上昇となった。前年同月比では+3.5%となり、2か月ぶりに前年同月水準を上回った。業種別でみると、食料品工業、化学工業、業務用機械工業など23業種中14業種が上昇し、輸送機械工業、生産用機械工業、窯業・土石製品工業など9業種が低下した。



出所：経済産業省・県「鉱工業指数」



出所：経済産業省・県「鉱工業指数」

## < 参考 > 業種別出荷ウエイト

埼玉県の鉱工業全体に占める業種別の出荷ウエイトは以下の通り。

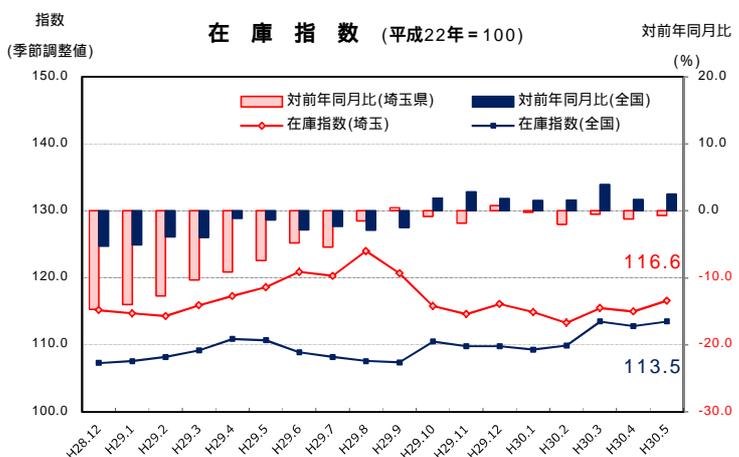
輸送機械 24.7% 化学工業 13.1% 食料品 8.6% プラスチック 6.2% 情報通信 5.3%

業務用機械 4.5% 電気機械 4.5% その他 33.1%

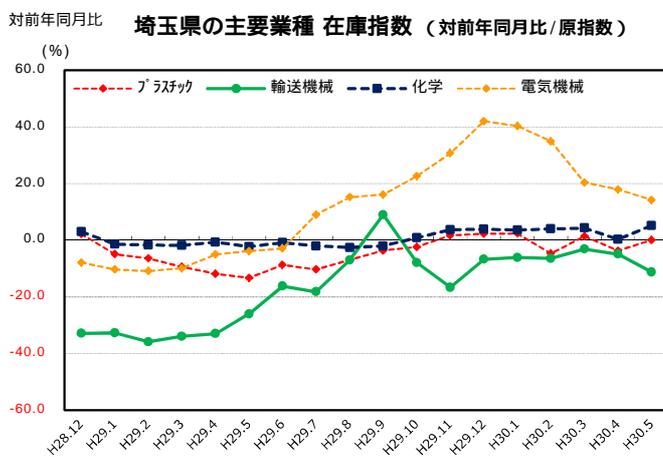
【出所】県「鉱工業指数」基準時=平成22年

## < 在庫指数 >

5月の鉱工業在庫指数(季節調整済値)は116.6(前月比1.4%)となり、2か月ぶりの上昇となった。前年同月比では0.7%となり、5か月連続で前年同月水準を下回った。業種別でみると、化学工業、家具工業、生産用機械工業など20業種中13業種が上昇し、電気機械工業、パルプ・紙・紙加工品工業、鉄鋼業など7業種が低下した。



出所：経済産業省・県「鉱工業指数」



出所：経済産業省・県「鉱工業指数」

<参考>業種別在庫ウエイト

埼玉県 の 鉱工業 全体 に 占める 業種別 の 在庫ウエイト は 以下 の 通り。

プラスチック 13.3% 輸送機械 12.2% 化学工業 11.0% 電気機械 10.2% 金属製品 9.4%  
 電子部品 8.3% 窯業土石 6.2% その他 29.4%

【出所】県「鉱工業指数」基準時=平成22年



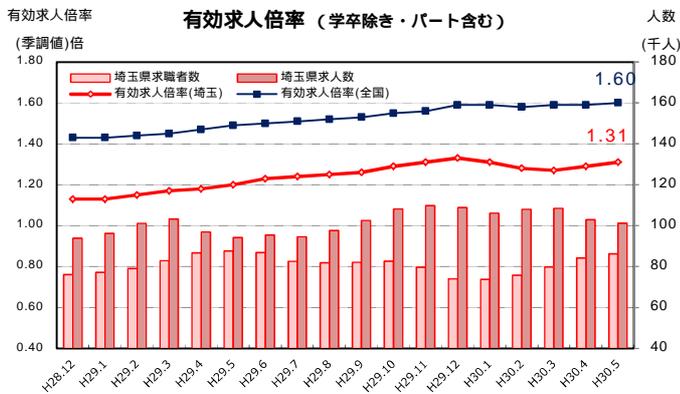
鉱工業指数

- ・製造業と鉱業の生産・出荷・在庫の動きを基準時点(平成22年)を100として指数化したものです。
- ・生産指数と出荷指数は、景気の山、谷とほぼ同じ動きを示すとされ、景気動向指数の一致系列に入っています。
- ・埼玉県の鉱工業生産は、県内総生産の2割を超える水準となっており、生産活動の動きが景気に敏感に反応することから、鉱工業指数は景気観測には欠かせない指標です。

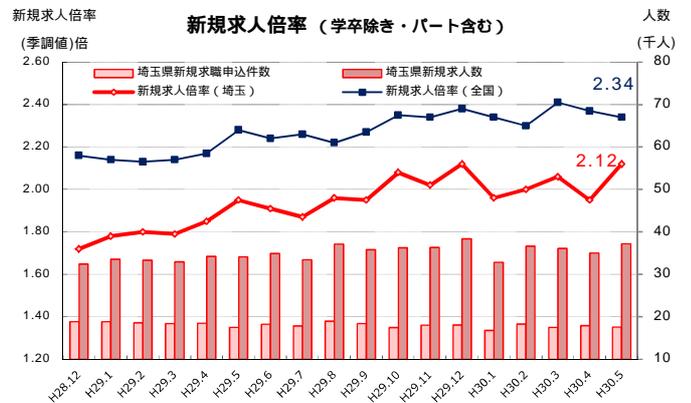
(2) 雇用

<個別判断>改善している(前月からの判断推移)

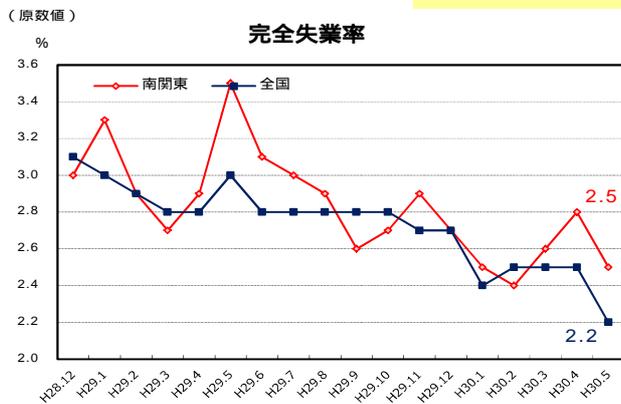
5月の有効求人倍率(季節調整値、新規学卒者除きパートタイム労働者含む)は1.31倍(前月比+0.02ポイント、前年同月比+0.11ポイント)となった。新規求人倍率(季節調整値)は2.12倍(前月比+0.17ポイント、前年同月比+0.17ポイント)。県内を就業地とする求人数を用い算出した就業地ベースの有効求人倍率は1.49倍。  
 5月の完全失業率(南関東)は2.5%(前月比0.3ポイント、前年同月比1.0ポイント)。



出所：埼玉労働局「労働市場ニュース」



出所：埼玉労働局「労働市場ニュース」



出所：埼玉労働局「労働市場ニュース」



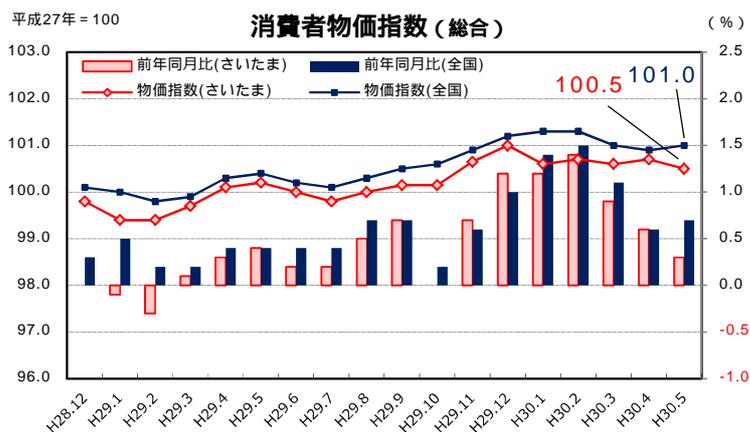
完全失業率

- ・完全失業率は労働力人口に占める完全失業者の割合です。
- ・完全失業者とは仕事がないものの、就業を希望しており、仕事があればすぐ就くことができる者をさします。

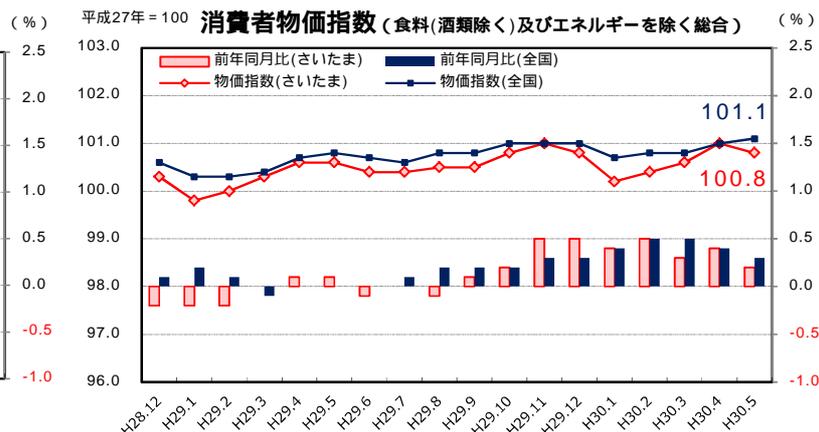
### (3) 消費者物価

#### < 個別判断 > 上昇に転じつつある (前月からの判断推移)

5月の消費者物価指数(さいたま市、平成27年=100)は総合指数で100.5となり、前月比0.2%、前年同月比は+0.3%となった。  
 生鮮食品及びエネルギーを除く総合指数は100.8となり、前月比0.2%、前年同月比は+0.2%となった。  
 前月比で上昇に寄与したのは「光熱・水道」などで、前年同月比で上昇に寄与したのは「光熱・水道」、「交通・通信」などであった。



出所：総務省「消費者物価指数」、埼玉県「消費者物価指数速報」



出所：総務省「消費者物価指数」、埼玉県「消費者物価指数速報」



#### 消費者物価指数

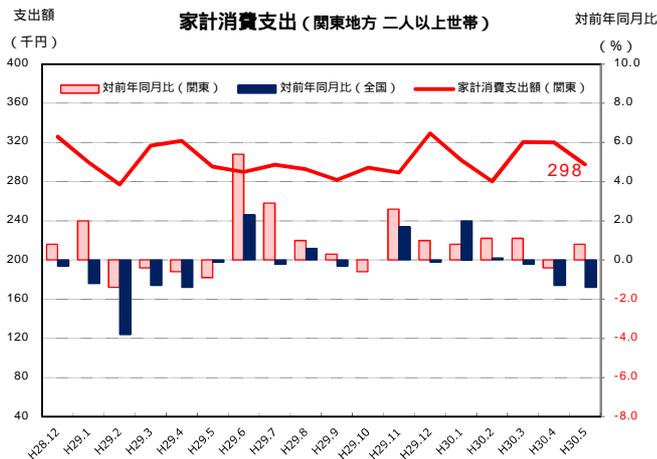
- ・消費者が購入する財やサービスなどの物価の動きを把握するために指数化された統計資料で、CPI (= Consumer Price Index)とも略されます。
- ・一般に、当該指数が持続的に上昇(下落)基調にあるなど、持続的な物価上昇(下落)がみられる場合にインフレ(デフレ)と判断されます。
- ・日銀は平成25年1月に「物価安定の目標」を消費者物価の前年比上昇率2%と定め、各種金融緩和政策を実施・継続しています。

## (4) 消費

< 個別判断 > 持ち直している (前月からの判断推移)

### ア 家計消費

5月の家計消費支出(関東地方、2人以上世帯)は298千円(前年同月比+0.8%)となり、2か月ぶりに前年同月実績を上回った。



出所：総務省統計局「家計調査報告」



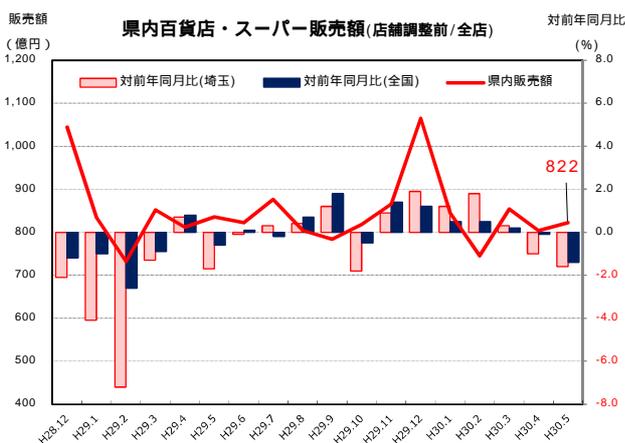
#### 【家計消費支出】

- ・全国約9千世帯を対象とする調査から計算される1世帯当たりの月間平均支出で、消費動向を消費した側からつかむことができます。
- ・家計消費支出は景気動向指数の遅行系列に入っています。核家族化により世帯人数が減少するなど、1世帯当たりの支出は長期的に減少する傾向があり、その影響を考慮する必要があります。

### イ 百貨店・スーパー販売額

5月の県内百貨店・スーパー販売額(店舗調整前/全店ベース)は822億円(前年同月比1.6%)と、2か月連続で前年同月実績を下回った。

業態別では百貨店(16店舗)の販売額は156億円、前年同月比4.8%。スーパーマーケット(298店舗)の販売額は666億円、前年同月比0.9%となった。



出所：関東経済産業局「百貨店・スーパー販売の動向」



#### 【百貨店・スーパー販売額】

- ・大型百貨店(売場面積が政令指定都市で3,000㎡以上、その他1,500㎡以上)と大型スーパー(売場面積1,500㎡以上)における販売額で、消費動向を消費された側から捉えた業界統計です。
- ・専門店やコンビニ等が対象となっていないため、消費の多様化が進むなか、消費動向全般の判断には注意が必要です。
- ・既存店とは、当月及び前年同月とも調査の対象となっている事業所をいい、既存店販売額は全店販売額に比べ店舗数の増減による影響が取り除かれた指標となっています。

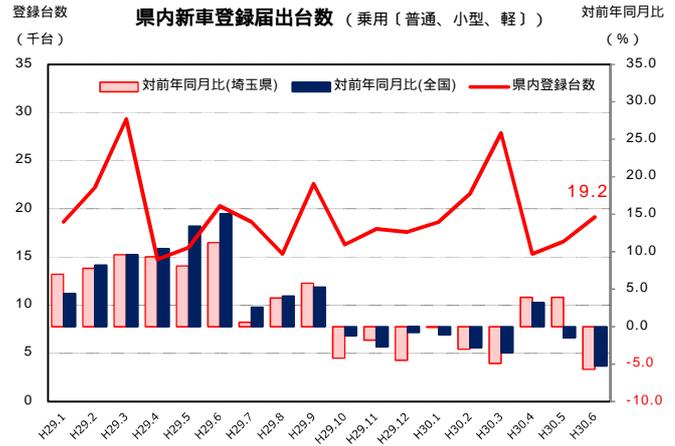
## ウ 新車登録・届出台数

6月の新車登録・届出台数は19.2千台(前年同月比 5.7%)となり、3か月ぶりに前年同月実績を下回った。



### 【新車登録・届出台数】

- 消費されるモノで代表的な高額商品である、自動車の販売状況を把握するもので、百貨店・スーパー販売額と同様、消費動向を消費された側から捉えた業界統計です。

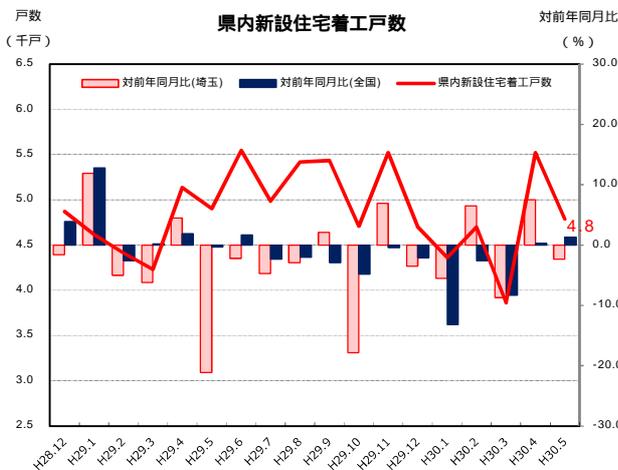


出所：日本自動車販売協会連合会・全国軽自動車協会連合会  
埼玉県自動車販売協会・埼玉県軽自動車協会

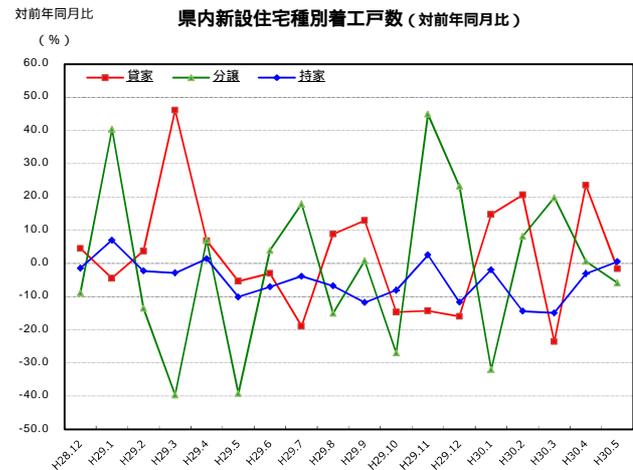
## (5) 住宅投資

### <個別判断>弱含んでいる(前月からの判断推移)

5月の新設住宅着工戸数は4,789戸(前年同月比 2.3%)となり、2か月ぶりに前年同月実績を下回った。持家が1,253戸(同+0.5%)、貸家が1,983戸(同 1.7%)、分譲が1,541戸(同 5.9%)となっている。



出所：国土交通省「建築着工統計調査」



出所：国土交通省「建築着工統計調査」



### 新設住宅着工戸数

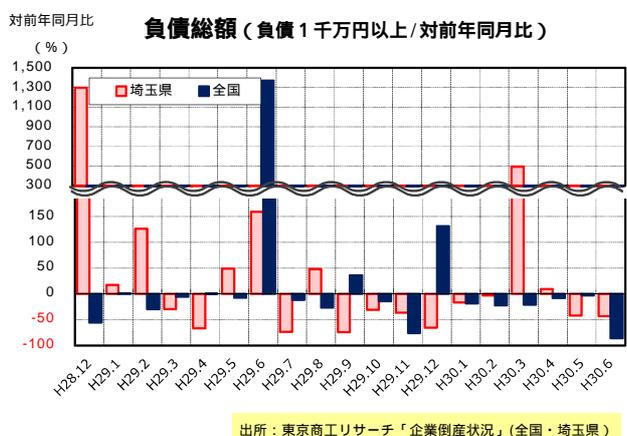
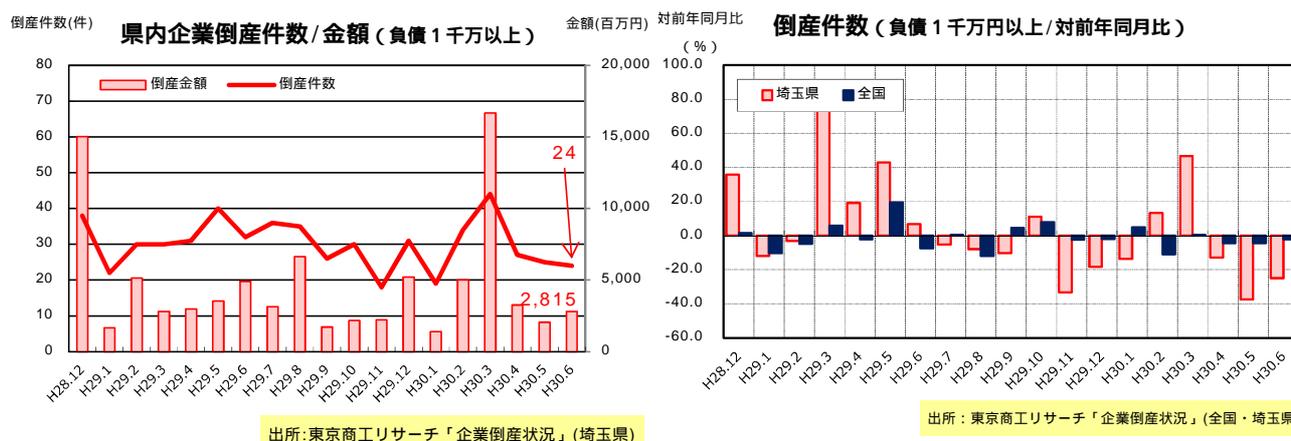
- 住宅投資はGDPのおおむね3%程度にすぎませんが、マンションや家を作るには色々な材料が必要となり、また、建設労働者など多くの人に働いてもらわなければなりません。さらには入居する人は電気製品などを新たに買換えることが多く、様々な経済効果を生み出します。
- 住宅投資は多額の資金を要するため、短期的な所得変動よりも、景気停滞期や回復初期における金利の低下、地価・建築コストの安定、景気対策などが誘因となると考えられます。

## (6) 企業動向

### ア 倒産

#### < 個別判断 > 低水準で推移している ( 前月からの判断推移 )

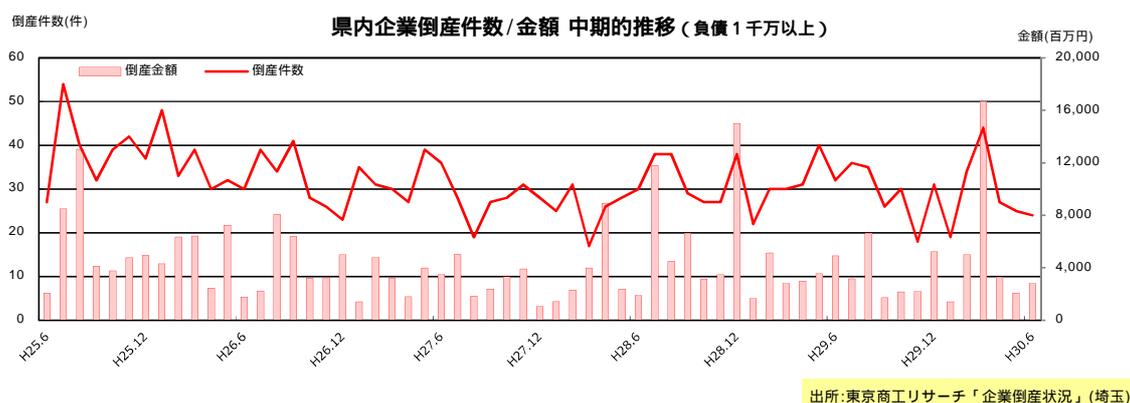
6月の企業倒産件数は24件(前年同月比 8件)で、3か月連続で前年同月実績を下回った。産業別では建設業が8件で最も多く、サービス業他各5件、製造業4件と続いた。負債総額は28.15億円(前年同月比 20.94億円)。3か月ぶりに負債額10億円以上の大型倒産が発生した。



**Point 倒産**

- ・企業が債務の支払不能や、経済活動を続けることが困難になった状態を指します。
- ・売上が増加している黒字企業でも、必要資金が不足し、倒産するケースがあります。
- ・一方、倒産により企業の新陳代謝が図られ、ヒト・モノ・カネの循環が円滑になる一面もあるといわれます。

#### < 参考 > 県内企業倒産件数/金額 中期的推移

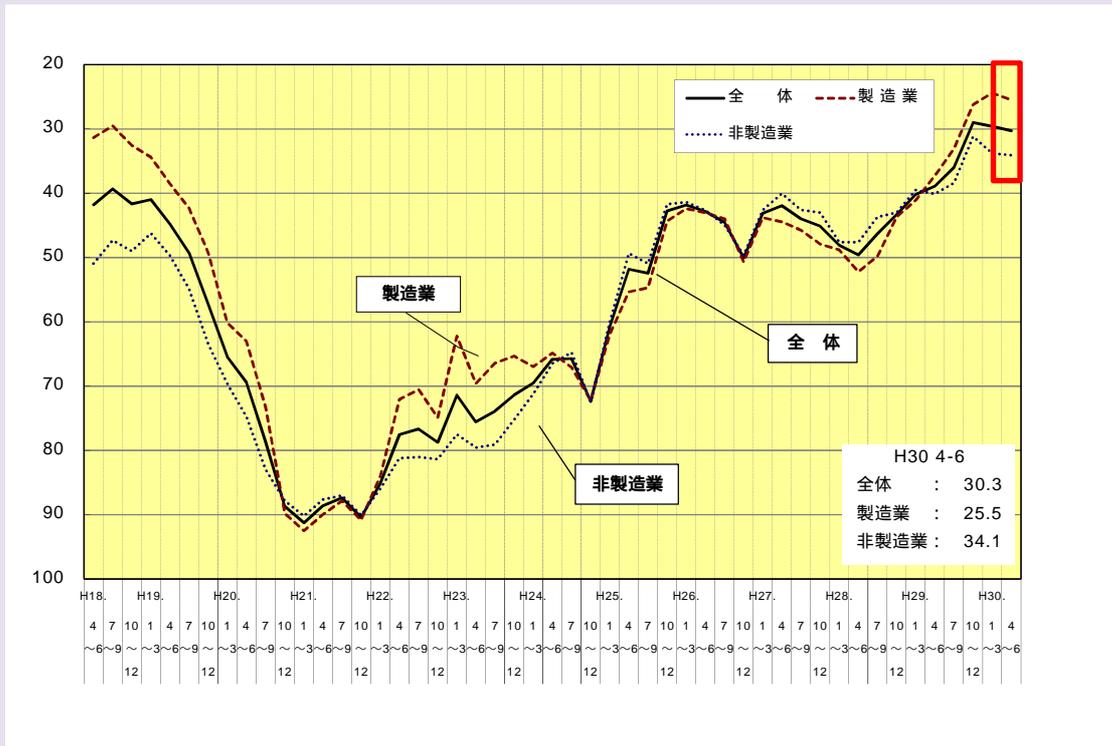


## イ 景況感

< 個別判断 > 回復に足踏みがみられる（前月からの判断推移）

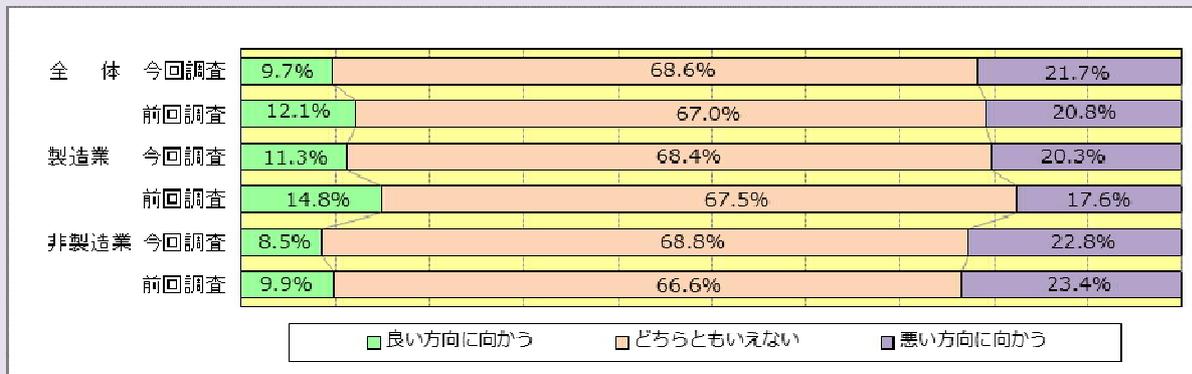
### 《「埼玉県四半期経営動向調査（平成 30 年 4 - 6 月期）」》

自社業界の景気について、「好況である」とみる企業は 8.2%、「不況である」とみる企業は 38.5%で、景況感 DI（「好況である」-「不況である」の企業割合）は 30.3 となった。前期（ 29.6）から 0.7 ポイント減少し、2 期連続で悪化した。業種別にみると、製造業（ 25.5）は 8 期ぶりに悪化し、非製造業（ 34.1）は 2 期連続で悪化した。



### 来期（平成 30 年 7～9 月期）の見通し

先行きについては、「良い方向に向かう」とみる企業は 9.7%で（前回調査(H30.1-3月)比 2.4 ポイント)、「悪い方向に向かう」とみる企業は 21.7%（前回調査比 +0.9 ポイント）だった。



本文中の割合(%)については、小数点以下第2位を四捨五入して表記しています。

## 《平成 30 年 4 - 6 月期「財務省関東財務局法人企業景気予測調査(埼玉県分)」》

平成 30 年 4～6 月期の「貴社の景況判断 B S I」をみると、全規模・全産業ベースで「下降」超幅が縮小している。

これを規模別にみると、大企業は「上昇」超に転じ、中堅企業は「下降」超幅が拡大し、中小企業は「下降」超幅が縮小している。

また、業種別にみると、製造業は「下降」超幅が拡大し、非製造業は「下降」超幅が縮小している。

先行きについては、大企業は「上昇」超で推移し、中堅企業、中小企業は 30 年 10～12 月期に「上昇」超に転じる見通しとなっている。

### 〔貴社の景況判断 BSI の推移(原数値)〕

(前期比「上昇」－「下降」社数構成比)

【単位：%ポイント】

	30 年 1～3 月 前回調査	30 年 4～6 月 現状判断	30 年 7～9 月 見通し	30 年 10～12 月 見通し
全規模・全産業	6.3	5.7 ( 3.8)	0.3( 0.3)	3.8
大企業	1.6	3.0 ( 6.6)	12.1( 6.6)	6.1
中堅企業	1.4	7.9 ( 4.3)	1.3( 0.0)	7.9
中小企業	9.7	8.0( 5.9)	3.4( 1.6)	1.1
製造業	2.6	10.7 ( 1.7)	8.0( 9.6)	8.0
非製造業	8.4	2.9 ( 6.9)	3.9( 5.0)	1.5

(注) ( ) 書は前回(30年1～3月期)調査時の見通し。

(回答法人数 317 社)

## ウ 設備投資

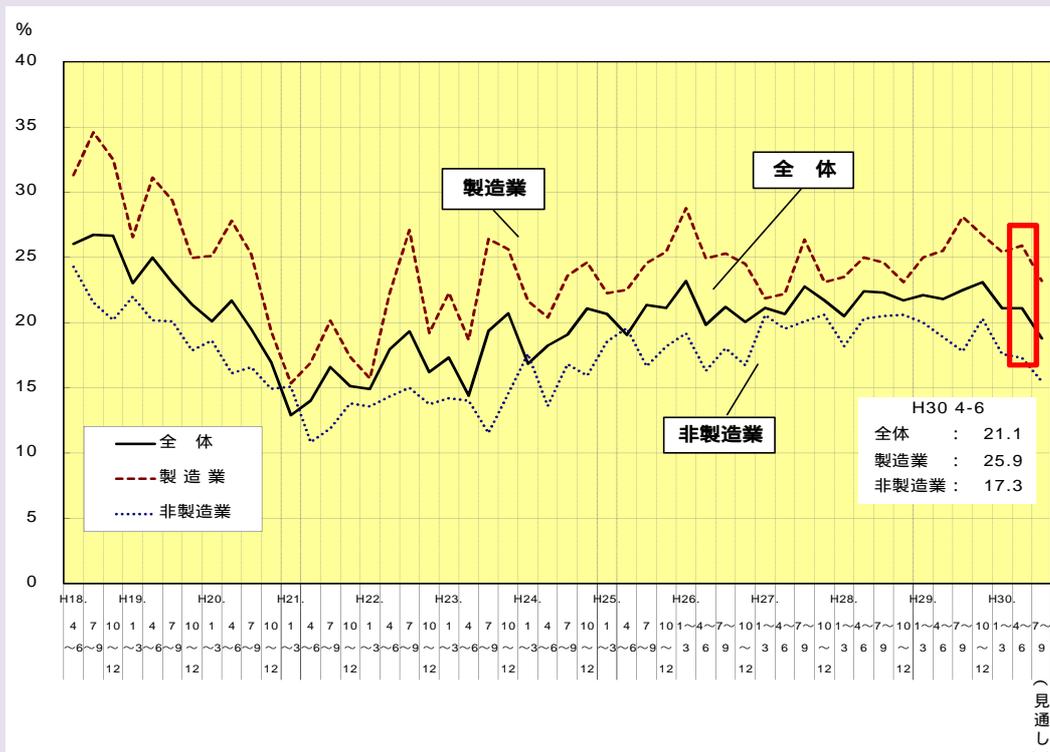
< 個別判断 > 増加に足踏みがみられる（前月からの判断推移）

### 「埼玉県四半期経営動向調査（平成30年4-6月期）」

当期に設備投資を実施した企業は21.1%で、前期（21.1%）から横ばいである。また、前年同期（21.8%）からは0.7ポイント減少した。

内容をみると、「生産・販売設備」が43.4%で最も高く、「車輛・運搬具」が30.5%、「情報化機器」が20.4%と続いている。

目的では、「更新・維持・補修」が61.8%で最も高く、「生産・販売能力の拡大」が31.8%、「合理化・省力化」が22.3%と続いている。



### 来期（平成30年7～9月期）の見通し

来期に設備投資を実施する予定の企業は18.8%で、当期から、2.3ポイント減少する見通しである。

本文中の割合(%)については、小数点以下第2位を四捨五入して表記しています。

## 《平成 30 年 4 - 6 月期「財務省関東財務局法人企業景気予測調査(埼玉県分)」》

### 30 年度上期は増加見込み、通期は減少見通し

30 年度上期の「設備投資計画額」は、全規模・全産業ベースで前年同期比 15.8% の増加見込みとなっている。

これを規模別にみると、大企業は同 20.1% の増加見込み、中堅企業は同 8.4%、中小企業は同 5.4% の減少見込みとなっている。

また、業種別にみると、製造業は同 10.8%、非製造業は同 19.4% の増加見込みとなっている。

30 年度下期は、全規模・全産業ベースで同 12.4% の減少見通しとなっている。

30 年度通期は、全規模・全産業ベースで同 1.9% の減少見通しとなっている。

【前年同期比増減率：％】

	前年同期比増減率（％）		
	上期	下期	30 年度
全規模・全産業	15.8 ( 10.7 )	12.4 ( 10.3 )	1.9 ( 2.7 )
大 企 業	20.1 ( 14.8 )	6.6 ( 9.2 )	3.4 ( 1.1 )
中 堅 企 業	8.4 ( 15.9 )	43.0 ( 20.1 )	31.3 ( 17.9 )
中 小 企 業	5.4 ( 70.1 )	21.3 ( 29.4 )	8.2 ( 22.6 )
製 造 業	10.8 ( 3.9 )	12.5 ( 1.1 )	2.3 ( 1.4 )
非 製 造 業	19.4 ( 21.1 )	12.3 ( 13.5 )	1.7 ( 3.2 )

(注) ( ) 書は前回 (30 年 1~3 月期) 調査結果。

(回答法人数 317 社)

## 4 経済情報

### (1) 各種経済報告等

ア 内閣府「月例経済報告（7月）」

#### 《我が国経済の基調判断》：平成30年7月19日公表

**景気は、緩やかに回復している。**

- ・ 個人消費は、持ち直している。
- ・ 設備投資は、緩やかに増加している。
- ・ 輸出は、持ち直している。
- ・ 生産は、緩やかに増加している。
- ・ 企業収益は、改善している。  
企業の業況判断は、おおむね横ばいとなっている。
- ・ 雇用情勢は、着実に改善している。
- ・ 消費者物価は、このところ緩やかに上昇している。

先行きについては、雇用・所得環境の改善が続くなかで、各種政策の効果もあって、緩やかに回復が続くことが期待される。ただし、通商問題の動向が世界経済に与える影響や、海外経済の不確実性、金融資本市場の変動の影響に留意する必要がある。また、平成30年7月豪雨の経済に与える影響に十分留意する必要がある。

#### 《政策の基本的態度》

政府は、東日本大震災からの復興・創生及び平成28年（2016年）熊本地震からの復旧・復興に向けて取り組むとともに、デフレからの脱却を確実なものとし、経済再生と財政健全化の双方を同時に実現していく。このため、「経済財政運営と改革の基本方針2018」、「未来投資戦略2018」、「規制改革実施計画」、「まち・ひと・しごと創生基本方針2018」及び「ニッポン一億総活躍プラン」を着実に実行する。さらに、人づくり革命と生産性革命を車の両輪として少子高齢化という最大の壁に立ち向かうため、「新しい経済政策パッケージ」及び「人づくり革命基本構想」を着実に実行する。また、今般成立した働き方改革関連法を円滑に施行する。加えて、平成29年度補正予算及び平成30年度予算を迅速かつ着実に実施する。

好調な企業収益を、投資の増加や賃上げ・雇用環境の更なる改善等につなげ、地域や中小・小規模事業者も含めた経済の好循環の更なる拡大を実現する。

日本銀行には、経済・物価情勢を踏まえつつ、2%の物価安定目標を実現することを期待する。

## 《今月の判断》：平成30年7月18日公表

**管内経済は、改善している。**

- ・ 鉱工業生産活動 ～持ち直しの動きがみられる～
- ・ 個人消費 ～持ち直している～
- ・ 雇用情勢 ～着実に改善している～
- ・ 設備投資 ～前年度を上回る見込み～
- ・ 公共工事 ～5か月ぶりに前年同月を上回った～
- ・ 住宅着工 ～5か月連続で前年同月を下回った～

### 《要旨》

生産活動は、輸送機械工業をはじめ10業種で上昇したことから、4か月ぶりの低下となった。個人消費は、百貨店・スーパー販売額が2か月連続で前年同月を下回った。コンビニエンスストア販売額が、63か月連続で前年同月を上回った。

また、雇用情勢は、有効求人倍率が上昇するなど、総じてみると管内経済は、改善している。今後については、国際情勢や金融市場の動向が国内経済に与える影響について留意する必要がある。

#### 鉱工業生産活動

鉱工業生産指数は、情報通信機械工業、はん用機械工業等の8業種で上昇したものの、輸送機械工業、化学工業（除・医薬品）、生産用機械工業等の10業種で低下したことから、4か月ぶりの低下となった。総じてみれば、生産は持ち直しの動きがみられる。

#### 個人消費

百貨店・スーパー販売額は2か月連続で前年同月を下回った。品目では、「飲食料品」、「婦人・子供服・洋品」、「紳士服・洋品」が不調だった。コンビニエンスストア販売額は、63か月連続で前年同月を上回った。家電大型専門店販売額は、7か月連続で前年同月を上回った。ドラッグストア販売額は、15か月連続で前年同月を上回った。ホームセンター販売額は、5か月連続で前年同月を下回った。

乗用車新規登録台数（軽乗用車の新規販売台数を含む）は、軽乗用車が前年同月を上回ったものの、普通乗用車と小型乗用車が前年同月を下回り、3車種合計では2か月ぶりに前年同月を下回った。

総じてみれば、個人消費は持ち直している。

#### 雇用情勢

有効求人倍率は2か月連続で上昇し、新規求人倍率も2か月ぶりに上昇した。南関東の完全失業率（原数値）は12か月連続で改善するなど、雇用情勢は着実に改善している。

新規求人数（原数値）を産業別にみると、「サービス業（他に分類されないもの）」、「医療、福祉」、「生活関連サービス業、娯楽業」などで前年同月を上回った。

### 《主要指標の動向（5月）》

#### 1. 鉱工業生産活動

鉱工業生産指数	： 96.1、前月比	1.8%（4か月ぶり低下）
出荷指数	： 91.6、同	3.0%（2か月ぶり低下）
在庫指数	： 101.5、同	+0.1%（2か月ぶり上昇） 平成22年基準、季節調整済指数

## 2. 個人消費

### (1) 百貨店・スーパー販売額

百貨店・スーパー販売額	： 6,686 億円、既存店前年同月比	1.8% (2 か月連続減少)
百貨店販売額	： 2,346 億円、同	1.3% (3 か月連続減少)
スーパー販売額	： 4,340 億円、同	2.0% (2 か月連続減少)

### (2) コンビニエンスストア・家電大型専門店・ドラッグストア・ホームセンター販売額

コンビニエンスストア販売額	： 4,463 億円、前年同月比	+0.8% (63 か月連続増加)
家電大型専門店販売額	： 1,543 億円、同	+1.0% (7 か月連続増加)
ドラッグストア販売額	： 2,280 億円、同	+3.0% (15 か月連続増加)
ホームセンター販売額	： 1,254 億円、同	5.0% (5 か月連続減少)

### (3) 乗用車新規登録台数(軽乗用車販売台数を含む)

乗用車新規登録台数	： 112,476 台、前年同月比	0.9% (2 か月ぶり減少)		
普通乗用車	： 43,843 台、同	2.3%、小型乗用車	： 34,561 台、同	1.8%
軽乗用車	： 34,072 台、同	+2.0%		

### (4) 実質消費支出(家計調査、関東・二人以上の世帯)

消費支出：1 世帯当たり 297,529 円、前年同月比(実質)+0.0% (6 か月ぶり増加)

## 3. 雇用情勢

有効求人倍率(季節調整値)	： 1.64 倍、前月差+0.02 ポイント	(2 か月連続上昇)
新規求人倍率(季節調整値)	： 2.50 倍、前月差+0.02 ポイント	(2 か月ぶり上昇)
事業主都合離職者数	： 14,444 人、前年同月比	+7.4% (15 か月ぶり増加)
南関東完全失業率(原数値)	： 2.5%、前年同月差	1.0 ポイント(12 か月連続改善)

## 4. 設備投資

法人企業景気予測調査(関東)：全産業前年度比+13.5%、製造業同+21.3%、非製造業同+9.4%

## 5. 公共工事

平成 30 年度累計公共工事請負額	： 1 兆 1,454 億円、前年同月比	+1.4%
公共工事請負金額	： 4,176 億円、前年同月比	+19.3% (5 か月ぶり増加)

## 6. 住宅着工

新設住宅着工戸数：34,492 戸、前年同月比 6.0% (5 か月連続減少)

## 7. 物価

消費者物価指数 関東、生鮮食品を除く総合	： 100.8、前年同月比	+0.7% (14 か月連続上昇)	
国内企業物価指数 全国	： 101.1、前月比	+0.6%、前年同月比	+2.7% (2 か月連続上昇)

《総括判断》平成30年4月24日公表

緩やかに回復しつつある

個人消費は、乗用車の新車登録届出台数が前年を下回っているものの、百貨店・スーパー販売額が前年を上回っており、コンビニエンスストア販売額も前年を上回っているなど、全体として緩やかに回復しつつある。

生産活動は、化学で増産が続いているものの、輸送機械に弱い動きがみられるほか、生産用機械が減産に転じるなど、全体として持ち直しのテンポが緩やかになっている。雇用情勢は、改善している。

先行きについては、雇用・所得環境の改善が続くなかで、各種政策の効果により、着実に景気が回復していくことが期待される。ただし、海外経済の動向などを注視する必要がある。

【各項目の判断】

項目	判断	主な要点
個人消費	緩やかに回復しつつある	百貨店・スーパー販売額は、食料品や化粧品が好調であるとともに、ハレの日需要が旺盛であったことから、前年を上回っている。コンビニエンスストア販売額は、カウンターまわりの商品や総菜などが好調であり、前年を上回っている。乗用車の新車登録届出台数は、軽自動車は前年を上回っているものの、普通車、小型車は新型車効果の一巡などの影響により前年を下回っている。これらのことなどから、個人消費は全体として緩やかに回復しつつある。
生産活動	持ち直しのテンポが緩やかになっている	生産を業種別にみると、化学で増産が続いているものの、輸送機械に弱い動きがみられるほか、生産用機械が減産に転じるなど、全体として持ち直しのテンポが緩やかになっている。
雇用情勢	改善している	有効求人倍率は概ね横ばいで推移しており、完全失業率は低い水準で推移しているなど、雇用情勢は改善している。
設備投資	29年度は減少見込みとなっている(全規模・全産業)	29年度の設備投資計画は、製造業では前年比5.1%の減少見込み、非製造業では同8.1%の減少見込みとなっており、全産業では同6.9%の減少見込みとなっている。
企業収益	29年度は増益見込みとなっている(全規模)	29年度の経常損益(除く「電気・ガス・水道業」、「金融業、保険業」)は、製造業では前年比17.8%の増益見込み、非製造業では同10.5%の減益見込みとなっており、全体では同5.8%の増益見込みとなっている。
企業の景況感	「下降」超となっている(全規模・全産業)	先行きについては、30年7～9月期に「上昇」超に転じる見通しとなっている。
住宅建設	前年並みとなっている	新設住宅着工戸数をみると、持家及び分譲住宅は前年を下回っているものの、貸家は前年を上回っており、全体では前年並となっている。
公共事業	前年を下回っている	前払金保証請負金額を前年比でみると、都県、国、市区町村、独立行政法人等で前年を下回っており、全体としても前年を下回っている。

《総括判断》：平成30年4月24日公表

回復している

個人消費は、百貨店販売額が前年を下回っているものの、スーパー販売額及びコンビニエンスストア販売額が前年を上回っており、全体として回復しつつある。

生産活動は、輸送機械に弱い動きがみられるものの、電子部品・デバイスが増産に転じているほか、生産用機械で高水準となっているなど、全体として緩やかに持ち直している。雇用情勢は、改善している。

先行きについては、雇用・所得環境の改善が続くなかで、各種政策の効果により、着実に景気が回復していくことが期待される。ただし、海外経済の動向などを注視する必要がある。

【各項目別判断】

項目	判断	主な要点
個人消費	回復しつつある	スーパー販売額は、総菜や冷凍食品などが好調であるとともに、ハレの日需要が旺盛であったことから、前年を上回っている。コンビニエンスストア販売額は、カウンターまわりの商品や総菜などが好調であり、前年を上回っている。百貨店販売額は、化粧品や高額品は堅調であるものの、低温の日が続いたことから春物衣料の動き出しが遅く、前年を下回っている。家電販売額は、エアコンが好調であることから、全体として前年を上回っている。 また、乗用車の新車登録届出台数は、軽乗用車が前年を上回っているものの、普通車、小型車が新型車効果の一巡などの影響により前年を下回っている。このほか、旅行取扱高及び外食産業の売上高は前年を上回っている。これらのことなどから、個人消費は全体として回復しつつある。
生産活動	緩やかに持ち直している	生産を業種別にみると、輸送機械に弱い動きがみられるもの、電子部品・デバイスが増産に転じているほか、生産用機械で高水準となっているなど、全体として緩やかに持ち直している。 なお、非製造業では、リース業の取扱高、広告の売上高は前年を上回っているものの、情報サービス業の売上高は前年を下回っている。
雇用情勢	改善している	有効求人倍率はおおむね横ばいで推移しており、完全失業率は低い水準で推移しているなど、雇用情勢は改善している。
設備投資	29年度は増加見込みとなっている(全規模・全産業)	製造業では前年比5.6%の増加見込み、非製造業では同6.9%の増加見込みとなっている。全産業では同6.4%の増加見込みとなっている。
企業収益	29年度は増益見込みとなっている(全規模)	製造業では前年比9.6%の増益見込み、非製造業では同4.3%の増益見込みとなっている。全産業では同6.1%の増益見込みとなっている。
企業の景況感	「上昇」超となっている(全規模・全産業)	大企業、中堅企業は「上昇」超幅が縮小し、中小企業は「下降」超に転じている。
住宅建設	前年を下回っている	新設住宅着工戸数をみると、持家、貸家、分譲住宅のいずれも前年を下回っている。
公共事業	前年を下回っている	前払金保証請負金額をみると、独立行政法人等で上回っているものの、市区町村、都県、国で前年を下回っており、全体としても前年を下回っている。

## (2) 今月のキーワード「アントレプレナーシップ」

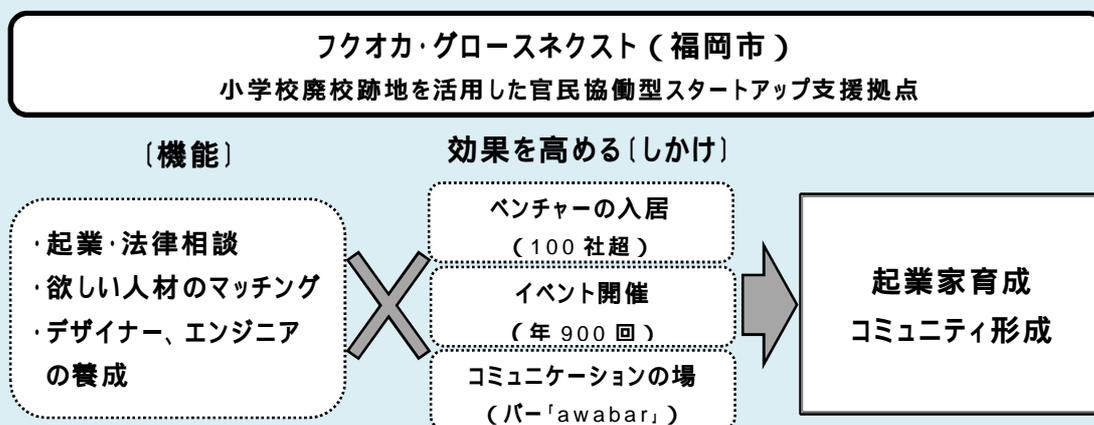
- ・アントレプレナーシップとは「起業家精神」、「イノベーションによって機会を見出し、事業を成功させる行動体系」などと訳されます。
- ・一人あたりGDPが日本より高い米国では、都心部に限らず各地で勢いのある企業が生まれ、経済を牽引しています。西海岸のシアトルがマイクロソフト、アマゾン、スターバックスなどのグローバル企業を輩出していることがそれを象徴しています。

### 地方も起業家育成

- ・一方、我が国の起業活動は東京・首都圏一極集中の色が強く、「起業するなら東京へ」「成功したら東京へ」という風潮が感じられます。
- ・こうした中、日本のシアトルを目指し、起業都市として気を吐いているのが福岡市です。
- ・福岡市は平成24年「スタートアップ都市宣言」を行い、平成26年に国家戦略特区「グローバル創業・雇用創出特区」に指定されました。これを活用し、外国人が起業しやすくなるよう在留資格を緩和する「スタートアップビザ」制度を作りました。
- ・同年には、官民協働型スタートアップ支援拠点「スタートアップカフェ」を開業しました。「カフェ」というスマートな空間で、毎日22時まで起業に関する幅広い相談に対応しており、若者や女性、仕事帰りのサラリーマンも気軽に利用できます。
- ・平成29年には「フクオカ・グロースネクスト」を開業し、市内に点在していたスタートアップ拠点を集約しました。ここでは100社を超えるベンチャーが入居するほか、年間900回ものイベントを開催しています。また、施設内のバーで起業仲間どうしが熱く語り合うこともでき、起業家育成とともにコミュニティの輪が広がる場となっています。

### 多様な人材が集まるのが、福岡の強み

- ・スタートアップ都市としての福岡の利点は、多様な人材が集まることです。アジアの主要都市から近いため外国人留学生が多く、九州の拠点である福岡の大学には九州各地から学生が集まります。
- ・多様な人が集まる場所は開放的でよそ者にやさしく、誰にでも活躍の機会があります。海外の人材も多いことで、グローバル感覚も培われるようになります。
- ・加えて孫正義氏、堀江貴文氏といった福岡出身の起業家の存在もアントレプレナーシップを後押ししています。
- ・福岡は自らの特徴を強みに、ビジネスチャンスを創っています。このように日本の各地域がそれぞれの持ち味を生かして、アントレプレナーシップを発揮できるフィールドを創ることができれば、日本全体の経済活力の底上げが図られるのではないのでしょうか。



### (3) 今月のトピック「平成 30 年上半期 埼玉県内企業倒産状況」

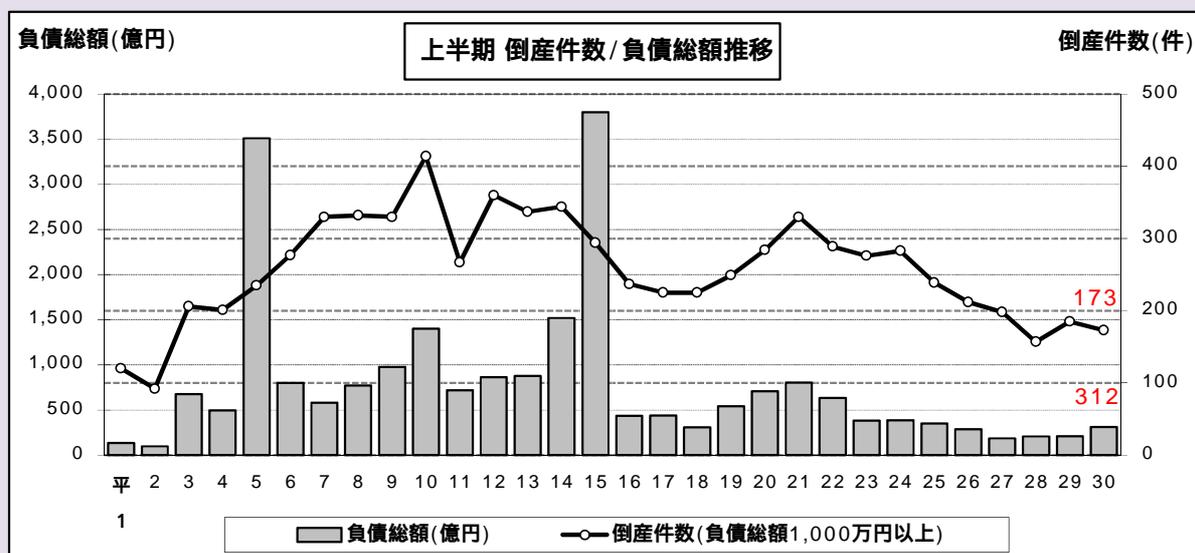
【倒産件数】173 件（前年比 12 件）

【負債総額】312 億 300 万円（前年比 + 101 億 6,400 万円）

- ・上半期としては 2 年ぶりの件数減
- ・全 10 産業中、運輸業をはじめ 5 産業が件数減
- ・負債額 10 億円以上の大型倒産は 5 件

18 年上半期は 2 年ぶりに前年同期の倒産件数を下回ったうえ、上半期としては 4 年連続で 200 件を割り込むなど、リーマン・ショック直後で、直近のピークとなった 09 年上半期（330 件）に比べれば依然として低水準にあるといえる。13 年 3 月末に中小企業金融円滑法が終了して以降も、金融機関が弾力的な資金支援を継続していることもあり、この間に経営改善が進んだ「復活企業」と、浮上のきっかけをつかめないまま延命が図られている「不振企業」が混在しながら、倒産が抑制されている状況とみられる。

18 年 3 月決算では円安や世界的な景気拡大を背景に、上場企業は軒並み好業績をあげている。しかし、6 月の日銀短観では原料高を背景に大企業製造業の景況感が 2 期連続で悪化するなど景気拡大に足踏み感が出始めたうえ、米国による貿易摩擦も先行き不透明感を醸し出している。このようななか中小企業は「原材料価格や人件費の高騰で経営コストの上昇圧力が強く、最終財への価格転嫁が進展しない」（全国中小企業団体中央会）状況とあって、企業倒産も緩やかに増勢に転じる可能性がある。



(株)東京商工リサーチ調べ、負債総額 1,000 万円以上

～内容について、ご意見等お寄せください～

発行 平成 30 年 7 月 31 日  
 作成 埼玉県企画財政部 計画調整課  
 総括担当 河野(加ノ)  
 電話 048-830-2134  
 Email [a2130@pref.saitama.lg.jp](mailto:a2130@pref.saitama.lg.jp)